



『月性詩稿』 月性 和紙に墨書・袋綴装 23.7×16.7cm

今回紹介する資料は幕末期に活躍した月性の詩文集である。幕末期には政治的危機意識の高まりを背景に、全国的に私塾が多数設立された。萩藩でも私塾における教育が活況を呈し、文化年間から明治初期までに106もの私塾が開設されている。そのなかでも尊攘思想を積極的に展開したのが僧月性の時習館（清狂草堂ともいった。清狂は号）と吉田松陰の松下村塾で、いずれも多数の志士を輩出したことで知られている。

月性は文化14（1817）年に周防大島郡遠崎村（現柳井市遠崎）の真宗妙円寺に生まれ、安政5（1858）年に41歳で没した。肥前佐賀に遊学中、長崎でオランダ船を目にしたことから月性は海防問題に強く関心をもつようになった。以後数年間諸国を遍歴し、各地の志士と交流を深めながら、その尊攘思想を培っていった。嘉永元（1848）年、郷里へ帰るとともに、妙円寺内に私塾時習館を開いた。月性はここで各地から集まる門弟の教育にあたりるとともに、藩内各地に出向いて仏教説法を行いながら海防論を説いた。

月性は漢詩人としても知られ、詩は写真の『月性詩稿』のほか、『清狂吟稿』『清狂遺稿』などにまとめられている。大坂への旅立ちに際し、「骨を埋むる何ぞ期せん墳墓の地、人間到る処青山有り」と吟じた「男児立志」の詩は有名である。なお、この資料とともに『護法小品』（『辟蛇篇』と合冊）と『清狂遺稿』を今回収集した。

（かきざきひろたか／教育博物館助教授）